

# 図書だより

第61号  
平成31年3月7日  
呉工業高等専門学校  
図書館  
<http://wwwlib.kure-nct.ac.jp>



凧ぐ波止場 (撮影：建築学科4年 佐藤 功典) 場所：アレイからすこじま公園

## 目次

・巻頭文 「図書館は変わりましたか、そして、どう変わろうとしていますか」	……………図書館長 笠井 聖二	2
・平成30年度校内読書感想文コンクールの表彰式	……………	3
・第15回校内読書感想文コンクール		
最優秀賞		
「野火」を読んで ―戦争の本当の恐ろしさ―	A1 高橋 美海	4
「『悩み』が男をつくる」を読んで	E5 徳広 怜二	5
優秀賞		
1年生の部	M 力石 享香 E 児島 悠飛 E 新浜 貴翔 C 大塚 愛未 C 本庄 晃汰 A 藏本 さくら ……………	6
A 小宇羅 由依		
2年生の部	M 福井 健太 M 八塚 寛信 C 松谷 理央 ……………	13
A 前田 琉亮 A 宮 蒼依 A 吉村 架音		
3年生の部	M 田村 晴海 E 長橋 朋也 C 石岡 紘平 ……………	19
A 河本 真拓		
4年生以上の部	A 今井 将隆 A 中山 幸	23
・講評	……………	25
・行事報告	平成30年度ブックハンティング …………… 学生会 文化環境委員長 鎌倉 脩士朗	28
	ブックハンティング図書紹介	
・お知らせ	貸出回数上位ベスト10, DVD 利用回数ランキング……………図書館	32
・編集後記		

## 巻頭文

## 図書館は変わりましたか、そして、どう変わろうとしていますか

## 図書館長 笠井 聖二

この「図書だより」の巻頭文を書くのは、今回で12回目になります。「図書だより」を年2回発行したこともありましたので、足掛け9年間になります。そして、今回が私の最後の巻頭文になります。これまでの、巻頭文のタイトルは、

- 図書館も変わっています
- 変化を加速し、変化を楽しもう
- 本を〇〇していますか
- 新鮮な「図書だより」を目指して
- 本を読み返すということ
- 呉高専本100選
- 電子書籍
- 「読書」とは
- 本棚を持ち歩く
- 図書館も決断しました
- 図書館を元気にしましょう

となっています。読書のことだけではなく、電子書籍のことなど新しい図書館を模索した内容も多くありました。最初の第49号「図書館も変わっています」では、図書館の一部改修で現在パソコンを置いている閲覧室（自習室）ができたことを報告しています。不思議なめぐりあわせで、最後の今回の巻頭文でも、図書館の改修をお知らせすることになりました。図書館のある教育センター棟（図書館棟の方が親しみのある呼び名かもしれません）が、今年の夏以降に改修されることになりました。まだ、改修の最終案は決定していませんが、図書館の一部機能が1階に移る予定です。それに伴い、蔵書の整理も必要になってきます。第50号の「変化を加速し、変化を楽しもう」で紹介したように

『本の冊数を減らし、物理的に空いたスペースで他のサービスを展開する』ことが実現するのではないかと期待しています。

当時、蔵書を30%程度減らすことを目指したいと考えていました。30%に根拠はありませんでしたが、図書館の機能と新しいことへの対応を考えた直感的な値です。当時の蔵書が約9.5万冊でしたが、昨年度末で9.4万冊となって、微減に留まっています。毎年、新しい図書を約1,500冊程度購入していますので、重複図書の廃棄など図書担当係の努力により、現状を維持しているのがやっとという状況です。

30%減をすることが目的ではありません。この後の「新しいサービスの提供」が目的です。この部分が、図書館の中でも十分に共有できていなかったのだと反省しています。今回の改修にあわせ、否応なしに蔵書の削減が必要になりそうです。図書館の機能・位置づけから再考し、これまでにない方法で蔵書を減らしていく必要があります。

では、どんなサービスが必要でしょうか。図書館の考えるサービスと学生の皆さんが希望するサービスが一致しているでしょうか。皆で考えていくことが必要になります。前回の「図書館を元気にしましょう」は、そのような気持ちを含んでいます。これまでは、図書館の内部から元気にする方法を考えてきましたが、来年度からは外から協力していきたいと思います。改修はひとつの区切りにすぎません。常に皆で、図書館を元気にする方法を考えていきましょう。

## 平成30年度 校内読書感想文コンクールの表彰式

平成30年度校内読書感想文コンクールの最優秀賞の表彰式を、12月20日（木）に校長室で行いました。

最優秀賞受賞者は、以下のとおりです。

建築学科1年 高橋 美海

電気情報工学科5年 徳広 怜二

受賞者には、賞状及び後援会からの副賞（図書カード）を授与しました。

今回受賞した、最優秀作品2編と優秀作品19編を、「図書だより」（平成31年2月発行予定）に掲載します。



校内読書感想文コンクールは、毎年図書館主催で実施しており、今年で15回目になります。

学生は、1年生：課題図書（芥川賞・直木賞受賞作等） 2年生：課題図書 3年生：ノンフィクションなど  
現代社会に関する本 4年生以上：自由 となっており、夏休み中に感想文をまとめて応募します。

次回もたくさんの応募があることを期待しています。

## 第15回 校内読書感想文コンクール最優秀賞

1年生の部

## 野火

大岡 昇平 著

建築学科一年 高橋 美海

「野火」を読んで

——戦争の本当の恐ろしさ——

この作品は戦争小説でありながら、いわゆる戦闘をくり広げるような場面は出てこない。太平洋戦争末期、フィリピンのレイテ島。敗戦間近の日本軍を襲ったのは、敵軍やゲリラではなく、飢えと孤独。結核を患い、本隊を追放された田村一等兵は、野火の点在する原野を彷徨いながら、懸命に生きながらえようとする。自分の手で人を殺し、ついに人肉を食べることを考える。その体験を戦後、精神病院の中で回想して書いた手記、という内容である。

草や木の根、自分の血を吸ったヒルまで食べた主人公が、最後まで人肉を食べることを拒否しながら、自らをだまし、生きるために人肉を猿の肉と思いつながら食べるまでの葛藤。今の平和な世の中で生きている私には、「人間はどんな異常の状況でも受け容れることが出来るものである」という彼の精神は、初めはどうしても理解できなかった。

また、この作品で印象に残るのは、主人公の田村が、いつも誰かに見られていると感じていることである。田村は人肉を食べたくはないが、飢えには勝てない。そこで自分を右と左に分離させる。右側のやったことは、左側の自分は知らないことにする。比島の女を殺した時も、「俺が

死んだら、食べてもいいよ。」と告げた兵士の死体に手を出そうとした時にも感じていた視線。それは、うしろめたいことがある時の神の視線だったのではないだろうか。生き延びるために人肉を食べようという誘惑にかられるが、神の視線を感じて左手が右手を抑えるということ、かろうじて理性を保つことができたのだと思う。

しかし同時に、田村の精神は徐々に崩壊し始める。自分は神に選ばれた特別な存在だという妄想を持ち、罪を犯した人間でも天使になれるという考えを持つ。そして、今まで反省なしに食べていた草や木や動物は、生きている以上は死んだ人間よりも食べてはいけないという倫理にたどり着く。私は宗教のことはよく分らないが、この頃に田村が感じている神のようなものは、彼が子供の頃から信仰していたキリスト教の神とは別のものになってしまっていたのではないだろうか。それが何なのかは分からないが、きっと昔から人々は、自分に都合の良い信仰心によって救われてきた部分が大いにあるのだろうと感じた。

戦時中の人肉食は、架空の話ではなく実際に起こっていた事実でもあり、実際に人肉を食べた日本兵が戦犯として処刑されたこともあるそうだ。人の肉を食べるという行為は、確かに倫理的には絶対に許されないことである。私もこれまでは、どのような状況に置かれても絶対にありえないと思っていた。しかし、この本を読んでいくうちに、もし自分が戦場で餓死寸前の状態まで追い込まれた時、理性をどこまで保つことができるのか自信がなくなってきた。

この「野火」は、本当に戦争を知っている人にしか書けない作品だと思ふ。極限状態の生と死の境目で、人間であり続けることの大変さが伝わってくる。「戦争を知らない人間は、半分は子供である」という言葉から、実際に経験しなければ書けない事実の重みが感じられる。単に、戦争は悲惨だ、戦争は起こしてはならないというありがちな感想ではすまされない。孤独と絶望がもたらすもの、人を人として見ることができなくなる恐怖、極限状態に追い込まれた時に、人はどう判断し行動するのかを考えさせられる作品である。そして、私達がいかに安全で平和な世の中で生きているのかを、改めて実感した。

戦争を体験した人々、語り継ぐ人々はほとんどなくなってくる。この作品をぜひ皆に読んでほしいし、私もまた読み返し、戦争の本当の恐ろしさを感じ、考えようと思ふ。

## 4年生以上の部

## 「悩み」が男をつくる

里中 李生 著

電子情報工学科5年 徳広 怜二

『「悩み」が男をつくる』を読んで

人は悩む。すでに答えが出ているものもあれば、悩んでも解決しないものもある。誰しも一度は言われたことがあるのではないだろうか、「そんなことで悩んでいるのか」と。私は「そんなこと」の答えの積み重ねが、人を創るのではないかと考える。自ら時間をかけて考えることで、「そんなこと」に対する信念が確立されるからだ。

著者の里中李生さんはこう述べている。人は悩んでこそ大きくなるもので、苦悩することは生きている証とも言える。誰にも言えないほどの悩みがあなたを創る。本の中で、読者の悩みに対し「くだらない」としながらも、自分なりの考えをしっかりと持って淡々と答えていた。例えばレストランの経営者がネットの中傷で客が減っている、との悩みがあった。それに対し、ネットの悪口はどうにもならないとした上で、ネットを捨てるとの答えだった。また、太っていて気弱な性格でいじめられると悩む人には、自身が本気で変わりたいなら、そのための行動を起こすしかない。そして同じような悩みを抱える人達を助けてみてはどうか、との提案もあった。

私は初めに、レストランの話は解決に至ってないと思い、自分でも考えた。やはりネットは見ないようにすればいいという答えとともに、新しい考えが生まれた。そもそも客足の減少の原因が、ネットの中傷によるものかということだ。経営者の話だと、経営側に一切の問題はなく、ネットの中傷さえなければ客足の減少はなかったように聞こえる。事実は確かめようがないが、ネットの中傷を封じることができないことは事実である。違う所に力を入れて欲しいと私は思う。気弱な人においては、ありのままの自分が受け入れられないことなど自覚しているはずだと私は思った。いじめの原因が分かっている、自らの努力で変えられるなら、やるべきことも分かっているのではないだろうか。私も小学生のとき、いじめられていたが、原因が自分で

はわからなかった。親に原因を告げられた時は衝撃だった。よかれと思っていたことだったからだ。そして私よりも理不尽にいじめられている人も当然いる。自分に甘えているのでは、ということだ。

私はこの本に、悩むことの大切さを教わった。困ったことがあって、すぐ人に相談して解決しても、自分のためにならないからだ。今までの自分は、悩むことは時間の無駄で遊んでいた方が気も晴れると思っていた。なので、人の言うことに流されやすい、中身のない人だった。しかし、悩みと向き合うようになり、時間をかけて答えを考え出すことで、少しずつ自分を創っている。まだまだ未熟であると自覚しているが、悩むことの大切さに気づいただけでも私にとっては大きな進歩であったと自負している。悩みは底がなく、悩みの先に深い悩みがある。深くなればなるほど、はつきりとした形が創られる。自分で出した答えは、自分を説得する一番大きな力になる。これが私が悩みに対して悩んだ答えである。私はこれからの人生を悩みながら歩んで行きたいと思う。自分で出した答えに自信を持ち、堂々と説明できる里中さんのような人になりたい。そのために私ができることは時間を惜しまず悩むことだ。悩むことは苦しいことではない。自覚していない自分の意志を知ることができるかもしれないからだ。さらなる成長を楽しみに、私は上を向いて悩み続けたい。

## 優 秀 賞

1年生の部

## 銀河鉄道の夜

宮沢 賢治 著

機械工学科一年 力石 享香

「銀河鉄道の夜」を読んで

——宝石箱の銀河の旅とほんとうの幸福——

美しい。一つひとつの言葉が美しい。小学一年生の夏、私をはじめこの作品を読んだときの印象はそれだった。黒曜石の地図、光る銀河の河原、月長石のような紫のりんどうの花。そのときの私は物語というよりも、この表現のすべてに感動していた。宝石箱の銀河を旅しているように、ページをめぐる手を止められなかったのを覚えている。今年の夏、あれから九年振りに「銀河鉄道の夜」を読んだ。これだけの年月を経て私が成長して変わっても、文章に散りばめられた言葉たちは昔と同じように、いや、昔よりももっと美しいと感じられた。

しかし、今の私が読んだ「銀河鉄道の夜」は、美しいだけではない。「なにがしあわせかわからないです。ほんとうにどんなつらいことでもそれがただしいみちを進む中のできことなら峠の上りも下りもみんなほんとうの幸福に近づく一あしずつですから。」

燈台守のこの言葉に、私ははっとさせられた。結果よければすべてよし、終わりよければすべてよし、最後にほんとうの幸福に辿りつけばよいのかもしれない。そんなことに気付かせてくれた。しかし、ほんとうの幸福とは何なのだろうか。

カムパネルラのほんとうの幸福は、カムパネルラのおつかさんのいちばんの幸だと言っていた。おつかさんにゆるしてもらったため、ほんとうにいいことをする。それがカムパネルラのただしいみちなのだ。

がさがさした親切そうな鳥捕りは、鳥を押し葉にして売って、からだに恰度合うほど稼いでいるくらいいいことはないと言っていた。それもただしいみちなのだ。

鷺の停車場から、青年や女の子たちが乗ってきた。彼らは乗っていた船が氷山にぶつかり、沈んだのだ。そのとき、女の子たちを守るためにはまだまだ小さな子ども達を押しつけねばならなかった。青年は、そんなにして助けてあげるよりはこのまま神の御前に行く方がほんとうにその人たちの幸福だと語った。そして、神にそむく罪はひとりで背負い、助けてあげようと言った。

そこでジョバンニは悩み、ふさぎ込んだ。だれかが風や寒さとたたかってはたらいっている。そのひとのさいわいのためにいったいどうしたらよいのだろうか。私にも分らなかった。何をすればその人が喜び、楽になり、幸せになれるのだろうか。その人が幸せになれば、誰かを幸せにできれば、私もほんとうの幸福に辿りつけるのだろうか。

そのときに燈台守が言ったのが、先ほどの「なにがしあわせかわからない」という言葉だ。なにがしあわせかわからなくても、ただしいみちを進んでゆけばほんとうの幸福に近づける。自分がただしいと思う、ほんとうにいいことをすればよいのだ。また、青年は言った。

「ああそうです。ただいちばんのさいわいに至るためにいろいろのかなしみもみんなおぼしめします。」

悲しいことがあっても、ただしいみちを進んでゆけばよいのだ。はじめて読んだときの「銀河鉄道の夜」は、美しい言葉、美しい世界を教えてください。九年振りに読んだ「銀河鉄道の夜」は、ほんとうの幸せについて考えさせてくれた。次に読むときは、どんなふうにも読むのだろうか。きっとそのときも、私はこの作品を好きでいるのだろう。

## 人間失格

太宰 治 著

電気情報工学科一年 児島 悠飛

「人間失格」を読んで

——現在の「人間」——

葉蔵が今の時代にいたならば、もっと早く狂ってしまったのだろうか。

当時の世間と、現代の世間どちらがよりいやらしく恐ろしいものなのだろう。時代が変わっただけで人間の本质は変わっていないのかもしれない。

人間の裏表の矛盾に悩み、攻撃されることなく順応するために葉蔵は道化を演じる。それは現代なら、クラスや人間関係から浮かないための方法としての一つなのだろう。しかし葉蔵は本来、陰鬱な理解されにくい性質の人間である。陽気なキャラを演じることが結果的に本人を苦しめていたと思われる。

自らが傷つくことを恐れ、道化を装う葉蔵をマダムは「とても良い子」と言う。だが、葉蔵からしたら堀木が馬鹿にしか見えないが、付け入られる隙を与えたのはその優しい道化の仮面が原因としか考えられないのだ。堀木は本音を言わない、拒否をしない葉蔵から嘲りを感じ取っていたのではないだろうか。上手く表現できない葉蔵の不自然な感じにフツフツと世間という仮面で対抗していたのではないだろうか。

人はどんな人間でも嘘はつく。悪意の有無はともかく嘘をついたほうが生きるのが簡単だからだ。ただ葉蔵との違いは、生活のための嘘だとしても、それに罪悪感を感じるほどの大袈裟なものではなく、しかたのないものだと行って受け流し、互いに特に期待も怒りもしない社会が出来上がってしまっている点だろう。一般に嘘で自分の身を亡ぼすほどの道化までは演じないのだ。

だが考えてみるとそれを当たり前のように世間ではよくあることとしてしまおう自分こそが、悪意のある人間の一人と言えるかもしれない。やはり葉蔵のように世間への恐怖を深くに沈めて、怯えながら生きればどんな人間も廃人になってしまう可能性はあるのではないだろうか。葉蔵の道化はいつの間にか自己防衛から、他者の期待に答えようとするものへと進化してしまい、堀木やヒラメからは旨い金づる、共産党からは利用しやすい駒の一つ、女たちからは葉蔵に救いと癒しを求められた。葉蔵の、誰かのために生きる道化は喜びや生きがいを感じるものではなく、ますます神経をすり減らすものでしかなかった。

人間は同じ人間同士であるのにも関わらず「腹の内がわからない」段階では構えてしまふ。疑心暗鬼になり、どこか警戒心を持ってしまふものだ。葉蔵の本心を解き放ったのは竹一だけだった。彼は葉蔵が最も知られたくない本当の姿を見抜くことができたのだ。葉蔵のこの小さな危機が道化の幕を完全に剥いでいたならば、葉蔵の正体を告白できていたのならば、「人間」を失格することはなかっただろう。なぜなら人は自らの全てを嘘で覆わないから生きていけるのだ。本音も出すことができるから自分は誠実であると、暗い思いもなくいられるのだ。本来は隠し切るものではない本音を、たったの少しも他人に見せることのなかった葉蔵の道化の仮面は、葉蔵の変態性よりも罪深い性質だったのではないだろうか。

我々は美德と虚構、道徳と偽善、理想と不信といった相反するものに囲まれていると皆十分に気付いている。だがどれだけ大きな世間の悪意に気づいても、戦うのではなく、世間という仮面をつけてでしか戦おうとしない。そんな悪意よりも自分が世間の中にいることを楽しみ、いつもまともなつもりをし、正しい発言をしている気になっている社会と人間を変えてゆくことが必要なのではないだろうか。

## 野火

大岡 昇平 著

電気情報工学科一年 新浜 貴翔

「野火」を読んで

——エゴイズムと自己犠牲——

私はこの話の冒頭を読んだあたりでは、戦争の悲惨さを伝えるために書かれた小説なのだろうと予測した。作者の大岡昇平さんも実際に戦争を経験されたそうなので、まず間違いないと思っていたが、それは間違いだ。確かに戦争の恐ろしさを伝える描写は数多くあった。しかしこの本にとって「戦争」は、人間の極限状態を表す最適なものとして扱われているだけであつた。つまりこの本に描かれている人間の極地を表すには「戦争」という最も暴力的な紛争解決手段の情景を借りる外にないということだ。

太平洋戦争中、日本の劣勢が決定的になったフィリピン戦線のレイテ島が舞台である。田村一等兵は肺病を患い、六本の芋を与えられて隊から追放される。その後一人で島を彷徨う田村は極度の飢餓から山に生えている草や自分の血を吸った山蛭まで食べるようになる。

そして狂った瀕死の将校と遭い、死ぬのを見届けると、本能と良心の呵責の矛盾に苦しむようになる。

私の心に残った部分は狂った瀕死の将校が左手の上膊部を右手でたたきながら、「何だ、お前まだいたのかい。可哀そうに。俺が死んだら、ここを食べてもいいよ。」

と言った場面である。

今までにも、会堂にある兵士の惨たらしい屍体のように、視覚的に生理的な嫌悪感を覚える描写はいくつかあつた。しかしこの場面には、そういったものはさほどないように思われる。にもかかわらず、私がこの本を読み進めていく中で最も衝撃を受けたのがここだつた。

私はこの部分を読んで「捨身飼虎」という話を思い出した。インドの太子が飢えている親子のトラを憐れみ、自分の肉を虎に与えるという話である。将校が五体満足な状態ではなかつたので少し異なる気もするが、この行為は究極の自己犠牲だと思ふ。田村はこの言葉を聞いたからこそ、自分の本能によって動く右腕を「人間の力ではない何か」によって止めることが出来たのではないだろうか。この言葉がなかつたならば、田村は躊躇しながらも、将校の左腕を食べていたであろう。そして、そのあとに見た野の百合が

「あだし、食べてもいいわよ。」

といったとき、その花に神を感じたのだと思ふ。

つまり、この本における「神」というのは自分を犠牲にしても他人を助けるものごとを言うのだと私は考えた。

田村は神のことを人間が願わなければ存在できないようなちっぽけなものだと言っていた。そんな彼が最後に「神に采あれ」と言ったのは自己犠牲の本懐に気が付いたからだと思う。自分が様々なものから支えられているという自覚がああ意味深な言葉を生んだのだろう。

しかし、会堂にあつた惨たらしい屍体ではなく、自分は事故だと肯定していたが殺してしまつた女性のことで吐き気を感じた田村。猿の肉と言って人の肉を食べていたことに怒らなかつた田村。この時はやはり故意ではない悪事は悪事ではないという人間のエゴイズムというものが自己犠牲の精神を超えてしまつたのだろう。しかし、私はある程度エゴイズムを持つことも大切だと思ふ。自分を犠牲にして他人を助けてばかりでは、人として幸せになれないと思ふからだ。加えて人の意見に流されてばかりの生活になつてしまふ。

つまりエゴイズムこそが人間の心であり、自己犠牲こそが神であり、良心なのではないか。私は、自分のエゴイズムと自己犠牲の精神を両立させたい。そして、自分の願望を満たしながらも、他の人を助けることで、自身の幸せを追求する生活を過ごしたいと思ふ。



## 奉教人の死

芥川 龍之介 著

環境都市工学科一年 大塚 愛未

「奉教人の死」を読んで

——差別のない世界——

なぜロオレンゾは作中で正体をあかさされなかったのか。この作品を読んだ私は、この点を疑問に感じた。

私がこの作品を読んだきっかけは、国語科の先生が芥川龍之介についての授業をされたときに、この作品を紹介されたからだ。この時はロオレンゾについてもっと知りたいと思った。場面場面においてロオレンゾに対する周りの環境は変化しており、そのときどきロオレンゾは何を思っていたのか読みときたいと思ったからだ。

「奉教人の死」は、芥川龍之介の作品の中でも、「キリシタンもの」と呼ばれており、室町時代から江戸時代にかけての、日本におけるキリスト教宣教師の活動がテーマになっている。この話の舞台は戦国時代の長崎、サンタルチアという教会にあり、ロオレンゾという少年が主人公である。ある年のクリスマスの夜、少年が教会の前で倒れていたところを助けられ、教会で暮らすようになった。彼の素性ははっきりとわかっておらず、故郷は「天国」、父の名は「デウス（キリスト教の神様のこと）」などと言われただけだった。しかし、非常に熱心な信仰心を持っており、宣教師たちから可愛がられていた。その後彼も年頃になり、町の傘屋の娘が妊娠した上に、「相手はロオレンゾだ」と父に言ったため、ロオレンゾは破門された。彼は町はずれで乞食となり、キリスト教徒という理由で差別を受けた。そして宣教師たちとも疎遠になっていき、傘屋の娘は一度も子の顔を見に来なかったロオレンゾを恨めしく思った。それから一年ほど経ったある日のこと、長崎の町を大火災が襲った。

傘屋の娘の家にも火が回り、娘たちは大慌てで逃げ出すが、家の中に子を忘れてきてしまう。すると、そこにロオレンゾが現れ、火の中に飛び込んでいった。群衆から「罪滅ぼしだ」などと言われる中で、ロオレンゾは子を救うが、自分は崩れた家に飲み込まれてしまった。ロオレンゾは宣教師たちに助けられたが今にも呼吸が絶えてしまいそうだった。すると突然娘が「嘘をついていた」と言い出した。実は、娘の子は隣家の男との間につくったものだった。娘はロオレンゾが好きだったがふり向いてもらえず、嘘をついたのだ。そして宣教師たちは、ロオレンゾの破れた服の隙間から乳房が覗いており、女ということに気が付いたのであった。

私はなぜロオレンゾが宣教師に助けられた時に女であることを言わなかったのか考えてみた。ロオレンゾは性別で差別される世界をなくしたかたではないかと思った。性別による偏見ではなく、ロオレンゾと接することでその人を評価してほしかったのではないかと考えた。そしてこの考えが最初に問うた「ロオレンゾが正体をあかさなかった理由」にも通ずると思う。性別も生まれも何もあかささないことで、その人のことを0から評価される。そして性別や生まれの違いにより差別されることもない。だからロオレンゾは正体をあかさなかったのではないかと思う。またロオレンゾは神ではないかと私は考える。長崎の町を大火災が襲ったとき「神よ助けたまえ」という声でロオレンゾが現れたからである。また、ロオレンゾは娘の犯した罪を被り、自分の命までも娘の子に捧げており、これはまさに、罪人を憐れむ心から自ら犠牲となって罪を償い、命を落としたキリストと同じであるからだ。つまり、この作品は神がロオレンゾとして人間の前に現れ、正体をあかささないことでこの世を差別のない世界にしていきたくったのではないかと私は思う。

だから私はこの作品を読んで、性別や生まれ、生まれもつたものに対して差別がない世界になってほしいし、それをまずは私が体現できるようにしていきたいと思った。

## 沈黙

遠藤 周作 著

環境都市工学科一年 本庄 晃汰

「沈黙」を読んで

——バードレは神に背いたか——

「去れサタンの子よ、行ってなんじが為すことを成せ」(ヨハネ福音書の福音書第13章27節より) ヨハネの福音書には、「主は愛する弟子、シモン・イスカリオテの子ユダに一口の浸した食物をお与えになった。すると、その食物を受けた後すぐ、サタンがそのものに入った」とある。しかし、バードレ・ロドリゴの思索には「なぜあの人は自分をやがて裏切る男を弟子の内に加えられていたのだろう」とある。キリストは、ユダが裏切ることを知っていて、それでいて「操り人形のように」に放っておき、「棄てておかれた」のである。

つまりこの小説は、「神への不信」という信仰に対するアンチテーゼなのだ。私はこう思ったのである。

ここですこしあらすじを紹介しておこう。この話は、島原の乱が鎮圧されて間もないころ、日本にいる宣教師からフェレイラの棄教を告げる手紙がロドリゴのもとに届いたというシーンから始まる。

日本の遠近で弾圧と棄教が繰り返されるなか、殉教という華々しくも憐れな手段で信仰を遂げた人々が多くいる中で、高名な神学者であるフェレイラが棄教した。ロドリゴら、フェレイラの弟子たちは、この事実を信じることができなかったのである。真相を見出すため日本に潜入した彼らは、往々に「日本人信徒たちに加えられる残酷な拷問と悲惨な殉教のうめき声」に苦悶する。自分たちを迎え入れてくれ

たトモギ村の人々は水磔によってきわめて無残な死を遂げた。そんな中、ロドリゴは、自らを今まで案内してきた男、そして、一度も踏み絵を行ない、神を裏切った男、キチジローに裏切られ投獄される。しかしそこには、連行されたロドリゴの行列を泣きわめきながら追いかけるキチジローの姿があった。

キチジローはロドリゴを売り、神を売った。しかし、なぜ彼はロドリゴを泣きながら追いかけたのだろうか。私は夢中で読み進めた。

ロドリゴは獄中にて、フェレイラと面会する。門番のいびきを聞いたロドリゴは失望をフェレイラにうちあげた。そこで彼は思わず恐ろしい事実を知ることになる。彼が門番のいびきだと思っていたのは、穴吊りに処される信徒の声であった。そうして彼は信徒たちが踏み絵をしたにもかかわらず、自分が棄教しないことで苦しんでいることを知る。神への信仰か、信仰によって苦しむ人々を救うのか、このジレンマを眼前にたたきつけられた彼はついに棄教を決断する。何度も踏まれ、すり減ったイエスの顔を眺めていると、彼にイエスが語りかける、「踏むがいい。お前の足の痛さをこの私が一番よく知っている」と。

ロドリゴは幕府から名と家をあたえられ、江戸の切支丹屋敷に住まうこととなる。ある日、後悔と自責の念に苛まれる彼のもとにキチジローが訪れ、「コンヒサン」(懺悔)を乞う。その時キリストが彼に語りかける。「私は沈黙していたのではない。お前たちと共に苦しんでいたのだ」「弱いものが強いものよりも苦しまなかったと、誰が言えるのか?」私には、この物語が「キリストとユダの対比、ロドリゴとキチジローへの投影」と見えていた。しかしそれだけではなかった。ロドリゴはユダだったのである。ロドリゴが踏み絵をした時と同じように、ユダがキリストを売った時も、彼らは心を引き裂かれたのである。

「弱いものが強いものより苦しまなかったと誰が言えるのか?」この一文にこの物語のすべては帰結する。背教者と呼ばれたロドリゴが抱いたのは「神への不信」ではなかった。彼は「自分のみが信じる神への信仰」を見出したのである。彼は裏切つてなどいかなかった。誰も裏切つてなどいかなかったのである。

## 雪国

川端 康成 著

建築学科一年 蔵本 さくら

「雪国」を読んで

——ひたむきに生きる——

「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。」美しい雪国を舞台に展開される、男女の切ない人間模様や数々の巧みな情景描写に私は魅了された。

無為徒食の生活を送る主人公島村には、心惹かれた芸者駒子があった。そんな駒子に会うため雪国に向かう途中、電車の中で出会った美しい娘葉子と連れの男行男。物語が進むにつれ、叶わぬ恋に、人物の揺れ動く心情の哀感が心を揺さぶる。

これらの人物の中で最も印象に残っているのが「駒子」である。彼女は、雪国を象徴する女性に相応しい、雪のように真っ白な清らかさや純粹さを持っている。私は彼女の強さや一途な生き方に心を打たれた。十九歳という、若い頃から許婚の療養費を稼ぐために芸者に出て働いていた駒子。十六歳である私が三年後、誰かのためにお金を稼ぐように働いている姿は想像できなかった。若さ故の苦労も多くあったであろう彼女の「どこで稼ぐのもおなじよ。くよくよすることはない。」というセリフが懸命に働き精一杯生きてゆく女性の強さを物語っているようで胸が熱くなった。

また、駒子の生き方は三味線を弾く場面にも表れていた。彼女の冬の朝に澄み通るような遠く山々まで響く真つ直ぐな音から、彼女が強い意志を持って努力を重ねてきたことが垣間見えるのだった。

このように、純粹に生きる駒子は、恋愛に対しても真つ直ぐだった。妻子持ちで

葉子にも惹かれている島村を一途に愛していたからだ。私だったら、芸者である身の上で旅人に恋することは叶わないし辛いものだからとけっして本気にはなれないと思う。しかし、彼女は、愛しさ故の別れの切なさや寂しさを隠すことなくさらけ出し、島村に愛を伝えていた。いつまで続くか分からない幸せへの不安や別れの苦しさを抱きながら自分の気持ちに素直でいる駒子の強さやその一途さには心を動かされた。

この春から親元を離れ、新たに高校生活が始まった。慣れない寮生活に、新しい人間関係。困ったことがあっても自分の力で解決していかなければならない中でうまくいかにことに頭を悩ませる日々が続いた。そんな自分と「駒子」が重なり、私は彼女から勇気をももらった。どこにいても自分が選んだ道を懸命に生きてゆく、うまくいかないことにも真摯に向き合い、努力していく。そんな彼女の生き方が今の自分を成長させ、悔しさやうまくいかないことを乗り越えていく、道しるべのように思えた。勉強や部活などこれからもたくさん壁にぶつかっていくのだと思うほど彼女のようになりたいと強く思った。

物語に、散りばめられている数々の情景描写も「雪国」の大きな魅力である。島村が列車で雪国に向かう途中、風景と窓ガラスに映る葉子が重なり「彼女の眼は夕闇の波間に浮かぶ、妖しく美しい夜光虫であった」と描写されていた。そこには人物と風景とが融け合い、幻想的な世界が描かれているのだ。このようにして、葉子は夕景色の鏡、駒子は朝雪の鏡といったかたちで、島村は表した。二人に惹かれていた島村だからこそ見えた世界、感じた美しさなのかもしれない。風景と人物、又は人物の心情までもが融け合った美しい描写を織り込む川端康成の偉大さを改めて感じた。

多くの美しい描写によって織り成された雪国。その中でひたむきに生きる駒子のように強くありたいと私は思う。周りからは徒労だと思われても、強い意志で努力を重ねることに意味があるのだと胸を張って言えるような生き方をしたい。真つ白な雪が何色にも染まらないからこそ、美しくあるように、純粹に一途な駒子が美しいのは、自分の生き方を精一杯、貫き続けるからであろう。

## 奉教人の死

芥川 龍之介 著

建築学科一年 小宇羅 由依

「奉教人の死」を読んで

——心の輝き——

私がこの話に興味を持ったきっかけは、授業の中で担当の先生からあらずしを聞いたことだ。ラストの展開を聞いた時の驚きは今も鮮明に覚えている。

この物語は、故郷は「天国」、父の名は「デウス」だという素性のはっきりしないロオレンゾという少年が教会の前で倒れていたという場面から始まる。彼の信心は素晴らしく、美しかったため、教会の宣教師達にかわいがられていた。年月が流れ、ロオレンゾは思春期を迎え、傘屋の娘と噂話がたつようになる。ロオレンゾは否定し、疑いは晴れたかに思えたが、傘屋の娘が身ごもり、ロオレンゾの子だと父に告げる。ロオレンゾは教会を追い出され、町のはずれで乞食となり、元キリスト教徒ということで差別を受けながら生活する。

しばらくの時が経ち、娘は子を産んだが、ロオレンゾは会いに来ず、娘はロオレンゾを恨めしく思っていた。一年余りの月日が経ち、町を大火事が襲った。娘達は家から逃げ出したが中に子を置き忘れたことに気づく。しかし、家は炎に包まれ、近づけない。そこにロオレンゾが現れ、子を救いに中へ入った。だが、家の梁が崩れロオレンゾは炎に飲み込まれた。娘は地面に倒れ込んだがその手には子が抱かれていた。ロオレンゾは後に助けられ、横たえられた。娘は、子は隣の家の者との子であり、ロオレンゾの素っ気ない態度から嘘をついたと懺悔をした。ロオレンゾの破れた服からは乳房が覗いていた。

私がこの物語を読んで疑問に思ったことはなぜロオレンゾは自身が女性である

と告白しなかったのかということだ。私がロオレンゾの立場だったら、追い出される前に女性であることを告げるだろう。乞食となりつらい暮らしをしていた時でも耐えられずに本当のことを話すだろう。しかしロオレンゾは最後まで隠し通そうとした。罪人を憐れむ気持ちから自らを犠牲にしたのだ。ここでの罪とは、もちろん、娘が恨みから嘘をついたことだが、それに加え、宣教師や神父、娘の父親が証拠もないのにロオレンゾを疑ってしまったことも含まれるだろう。これらの罪を一人で抱えていたのだ。それはまさにキリストと同じである。ここに彼の強い思いを感じた。私は、自分を陥れようとした人をつらい目に遭ってまで守ろうとは思わない。むしろ、相手を憎み、事情や気持ちをよく考えもしないで彼女の嘘を大勢の前で告白し、彼女を責めていたかもしれない。周囲が自分を信じてくれなかったことに対して不満を持っていたかもしれない。そして最後、ロオレンゾは「悔い改めた者は幸福であり、幸福な人間をわざわざ罪する必要はない。」と娘に許しを与える。ロオレンゾは一人の人間を成長させたのだ。しかし私は、娘に同情する気持ちもある。なぜなら好きな人にまったく振り向いてもらえないことは辛いと思うからだ。そして娘を尊敬すべき点もある。きちんとロオレンゾに懺悔した点だ。自分の過ちを認めること、それを伝えることは難しい。でもそれをする事ができた。彼女にも素敵なところがあるのかもしれない。

私はこの物語を読み、自分がこのような立ち場だったら宣教師、神父、娘の父のように真実を知らず、流される人間に当てはまってしまうだろうなと思った。私もロオレンゾのように、信心を貫き、信頼する人のことは噂ではなく、その人の話を聞いて判断しようと思った。また傘屋の娘のように悪いことをしたら、素直に謝りたい。人間関係で何かあった時、この話を思い出して、今、考えていること、感じていることを生かすことができたら、私がこの本に出会った価値はとても大きいものである。

2年生の部

「こころ」

夏目 漱石 著

機械工学科二年 福井 健太

「こころ」を読んで

——自分自身も「先生」——

夏目漱石の「こころ」。この広く知られた作品なら活字に疎い私でも読めるだろうと楽観的な考えで手に取ったのだが、この一冊にここまで心を見透かされるとは思ってもなかった。

物語は書生である「私」と「先生」の出会いから始まる。「私」は「先生」の不思議な雰囲気惹かれ、度々「先生」を訪ねるようになる。「私」はその度目に入る「先生」の不可解な発言や行動に疑念を抱く中、「私」の父の持病の悪化のため、「先生」に会う機会を失う。「私」は「先生」に手紙を書くが返信らしきものは来ない。ある日、やっと「先生」から届いた手紙は遺書であった。その内容がこれより後に書かれる。「先生」は二十歳にならないうちに両親を亡くしたが、信頼のおける叔父の下で大学に通うことができた。しかし、ある時その叔父に裏切られ、決別する。それ以来、叔父は善人から悪人へ豹変する愚かな人間の象徴として「先生」に刻まれる。その後「先生」は、ある未亡人の「奥さん」とその娘である「お嬢さん」の家へ下宿する。そして「お嬢さん」と恋に落ちる。そんな中、「先生」は古くからの友人「K」が途方に暮れているのを見過ごせず、下宿先へ招く。そのうち、「K」と「お嬢さん」が親しくなるのを見た「先生」は、嫉妬心から抜け駆けするように「お嬢さん」との結婚を申し出る。こうして、「お嬢さん」と「先生」の結婚が成立する。そしてある日、「K」が遺書を残して自殺する。それに対し、罪の意識を持ち続けた「先生」

は、「私」にこの過去を託し、自殺をしたというところで物語は終わりを迎える。

この作品で面白いのは、物語前半ではミステリアスで偏屈な人柄を漂わせていた「先生」が後半で、その過去はとても人間味に溢れていて、利己的で自尊心を強く持っていたと明かされるような構成がとられていることだ。また、不遇で学問がある「先生」という一人の人物の心情や人生に思わせ、「先生」、「私」、「K」のように固有名詞をあえて用いないことや、恋や嫉妬をする人間らしい「先生」の様子から、読者も含めた普遍的な人間の「こころ」を巧みに表現しているところもその要素の一つである。「こころ」という人間だけが持つものの美しさ、罪深さを見事に表現しているのである。

「私はちよつと目を通しただけで、まず助かったと思いました。」

これは「先生」が「K」の遺書を手に取り、最初に感じたことを表した一文である。

「K」の自殺が「K」の「お嬢さん」への思いをはねのけた自分にあると感じている「先生」は、遺書にそのことが綴られていないか不安だったため、綴られていないことを確認して安心したのだ。もし綴られていれば、「奥さん」や「お嬢さん」に軽蔑されるという不安があった。この何気ない一文だが、ここには「先生」が叔父のように善人から悪人へ豹変する様子が描かれていると思う。人間は何か犯したり失敗したりしてしまうと、その罪から逃れたいくなるものだ。私も、物を壊してしまったり、言いつけを破ったりしたときに表沙汰にならないと安心してしまうものだ。さらに「先生」はその罪をずっと後悔し続け、苦しんでいるが、私もそうして芽生えた罪の意識は長く引きずってしまふ方だ。そのためこの「先生」の「こころ」を読んでいると、まるで自分の「こころ」を見ているようにさえ感じるのだ。

この物語はお世辞にも良い結果には終わらない。この罪の自白を第三者である「私」にして、はっきりと終わりを示さないのは、「こころ」は「先生」だけでなく我々読者にも通ずることだからだと私はそう思う。

## 項羽と劉邦

司馬 遼太郎 著

機械工学科二年 八塚 寛信

「項羽と劉邦」を読んで

——人望について——

「劉邦はただ、〈おのれの能くせざる〉ところは、人にまかせる」という一事だけで、回転してきた」

このような一文がこの本の中にある。これは、劉邦のことを例えた一文であるが、言ってみれば、これはただの人まかせである。その一方で、項羽は、軍を率いれば百戦百勝の勇猛な王であり、この二人が争えば勝つ方は火を見るよりも明らかではなかった。しかし最終的に天下を取ったのは、劉邦のほうであった。この結果は非常に意外であり、人の上に立つ者の素質がどのようなものかを教えてくれると思う。秦代末期、絶対的な力を誇っていた秦に対し、項羽と劉邦が対称的ながらもそれぞれ反旗をひるがえし秦を打倒し、その後、天下の覇権をかけて決して仲が悪くはなかった二人が争っていく姿には、何とも言えない悲哀を感じた。その中で特に印象に残ったのは、鴻門の会だ。項羽の陣中を訪れた劉邦を、項羽の軍師である范増が後日の為殺そうとする。軍師の張良や樊噲の機転により難を逃れるといった場面であるが、この場面は、良い部下の大切さといったものを教えてくれると感じた。また、この会を転機に、命からがら逃げ帰った劉邦の方がだんだんと優勢になっていき、ここで劉邦を見逃した側の項羽が、何度も劉邦を追いつめながらも、最後には敗れて散っていく所に、物語ではない、実際に生きていた人々を描くもののおもしろさがあるのではないかと思う。

ではなぜ、項羽が敗れ、劉邦が天下を取ることができたのか。僕はその理由が、劉邦の虚にあると考える。虚とは、からっぽでなにもないといった意味であるが、一見、指導者の素質からはかけはなれて見える。だが、本文中にはこんなセリフがある。

「あつしがいなければ、劉あにいはいただの木偶の坊ですよ」

これは劉邦の部下である夏侯嬰の言葉である。また

「韓信のみるところ、愛すべき愚者という感じだった。もっとも痴愚という意味での愚者ではなく、自分をいつでもほうり出して実体はぼんやりしているという感じで、いわば大きな袋のようであった。」

というものもある。これは、劉邦の部下で二十万対二万で戦争し、勝ったという、漢の大將軍韓信にまつわる文だ。僕は、これこそが、劉邦の天下を取ることができた要因であると考え。つまり、劉邦には何もできないのであり、まわりの人が支えていないと、もろく倒れてしまう存在だ。実際、戦争においては韓信におよばず、知略においては張良には及ばない。だが、そんな者たちに、「支えてあげないといけない」と思わせてしまう無能さが、劉邦の魅力であると考ええる。

項羽は非常に優秀で果敢に富んだ人物であった。だが、自分の力のみで戦ったために最後には劉邦に敗れてしまったと僕は考える。僕には劉邦のように虚になることはできないが、余計な意地をはずに困ったらすぐに仲間を助けを求めるくらいは、できるようになれたらと思うている。

## 博士の愛した数式

小川 洋子 著

環境都市工学科二年 松谷 理史

「博士の愛した数式」を読んで

——愛の感情——

このような川端康成の言葉がある。

「別れる男に、花の名前をひとつ覚えておきなさい。花は毎年必ず咲きますから。」  
 ここでのキーワードは「花」だが、「博士の愛した数式」では「数式」である。キーワードが表す感情は、愛しさと寂しさであると私は思った。

一九九二年の夏、家政婦は数学者のもとで働くことになった。彼は、博士号を取る程の人物であり、家政婦とその息子は「博士」と呼んだ。しかし博士は、交通事故が原因で記憶の成長が一九七五年で止まっており、新しい記憶を80分間しか保持することができない。そのため彼の背広には、大切な事が書かれたメモが、沢山留められている。メモが増えると、時間の経過後記憶をリセットされた博士は、それを見て自分が、80分という時間を過ごした事を実感する。博士は素直に受け止めるが、きっと幾度も自分がそんな愛しいものを覚えていない空虚感に苛まれたことだろうと思った。

三人が出会い、別れまでの12年という短い年月を数式と阪神タイガースが、長年一緒にいたかのような温かい時間にしていった。

博士が愛した数式が、二人に愛を与える。そして、友愛数での繋がりの発見が三人の絆を強くした。さらに、博士の愛した江夏をきっかけに思い出を作り上げる。そういった愛の交わりの裏には、三人にそれぞれ与えられた寂しさという感情が隠れていると感じた。

《E=mc<sup>2</sup>》オイラーの公式

どこにも円は登場しないのに、予期せぬ宙から $\pi$ が $e$ の元に下り、恥ずかしがり屋の $i$ と握手する。身を寄せ合いじつと息を潜めているが、一人の人間が1つだけ足算した途端、世界が転換し、全てが0に抱き留められる。博士が教えてくれた心温かい公式。私も、無関係にしか見えない数の間に温かさを感じた。

時間を共有した二人も、どんなに温かい中においても時間が経てば、博士との関係性が0からなる寂しさを感じていただろう。博士にとって数式を教えることは、「自分」という存在を覚えていて欲しい。そういった欲求からの無意識のうちの行動なのではないかと思う。次第に博士は、記憶を保持できる時間が少なくなっていく。しかし、博士の周囲の人への愛情は変わることはなかった。

私は、祖母と祖父とのドライブが大好きだった。カセットテープで曲を流しながら、車を走らせる。車は次第に、カラオケボックスへと変わっていく。そんな夏が大好きだった。私達の十八番は「涙そうそう」だった。演歌をあまり知らない私でも、あの曲だけはイントロから歌うことが出来る。一昨年、祖母は他界した。おばあちゃん子だった私はとてもつらく受け入れがたい出来事で、何日も泣いていた。けれど、もう大丈夫。三人のドライブコースで、イヤホンを耳につけると胸が温かい。あの空間が蘇ってくる。私は、この本に非常に共感した。大切な人と大切なモノの繋がりが私にはあった。博士と二人にもあった。それは、自分を支えてくれる存在になり、そのモノまでも愛せるようになることを、改めてこの本で実感することができた。そして、モノには寂しさも隠れているのだと気づかされた。

彼の場合、愛情というのは「数式」だ。不器用な彼からの最上級の愛だ。私も彼のように、大切な人と大好きなモノを沢山共有できる人生を送りたい。そして、時間の中にある、愛の感情を感じ取れる人間になりたい。

「博士の愛した数式」は温かい愛の物語である。「数式」であれ「花」であれ、私は「どんなモノでもいいから愛を伝えなさい。」と博士に言われている様な気がした。

だから私は、ここから伝え始める。  
 「この本に出会えてよかった。」

## 博士の愛した数式

小川 洋子 著

建築学科二年 前田 琉亮

「博士の愛した数式」を読んで

— それはどんな数式なのか —

まず、数学とは何だろうか。面倒な課題、呪文のような数式、抽象的過ぎる概念。多くの人が大体この様なイメージを懐いているだろうし、恐らく数学の定義を明確に答えられる自身の有る人なんて殆ど居ないと思う。今回僕が読んだこの一冊は、そんな数学を持つ数多の定義の内の一つを僕に明示してくれた。

物語は、事故で記憶する力を失った数学者である博士と、博士の家政婦として彼の住居で働くこととなる主人公と、その息子を合わせた三人を中心に、主人公の視線を通して語られる。

「義弟の記憶は八十分しかもたない。」

博士の義姉からこう伝えられた主人公。毎日自分の事を忘れる博士と共に暮らす中で博士の内面、数学の美しさに少しずつ触れ合うこととなる。これが大まかなストーリーだ。僕は元から数学が好きだった。それがこの作品に出会ったきっかけでもある。物語の中で博士の口から溢れる数学のトリビアは誰にとっても解り易くて面白く、その魅力に主人公もどんどん惹かれていくという描写もある。数学好きには堪らないのではないだろうか。

物語が進み、或る日主人公は博士の家政婦を辞めさせられてしまう。主人公を辞めさせたのは、なんと依頼人である義姉。博士を失い途方に暮れていた主人公は博士を挟んで義姉と激しい諍いを始めた。その最中、博士は一行の数式を書き残して

その場を去る。それはオイラーの等式であった。それから暫くして、主人公は義姉の依頼で再び博士の家政婦に戻る事となる。

ここまで読了して改めて疑問に思った事が有る。結局、博士の愛した数式とはどんな数式なのだろうか。不思議な事にこの謎は最後のページを読み終えても解決することは無かった。恐らく僕を含め大方はそれこそあの有名なオイラーの等式であろうと推測するが、無論これが正解だとは限らない。この作品はオイラーの等式で有名な作品ではあるが、実を言うとこの数式が物語の中に登場することは殆ど無いのだ。そればかりか、博士が具体的にこの数式を愛しているという事実が読み取れる描写すら無い。その様にしてこの謎について考えるにつれてまた新しい疑問が生まれる。何故義姉と主人公の口論の場面で博士は二人にオイラーの等式を見せたのか。博士がこの数式に託した思いとは何か。正に、謎が謎を呼ぶといった恰好である。そこで僕は一つの解釈を考えた。それは主人公達の関係を博士がオイラーの等式に喩えた、というものだ。オイラーの等式とは平たく説明すると、数学上で極めて重要な四つの定数が組み合わさるとゼロということ。また重要な定数に等しくなる、ということを表した数式である。そして主要人物の数は丁度四人。四人揃って初めてゼロという一つの概念に着地する。前述したように博士がこの数式を書いた後、主人公は再び博士の家政婦に戻る事となるが、この数式に博士の四人の内一人でも欠けてほしくないという思いが託されているとすれば、博士が書いたこの数式が意味を持つ。すると、博士は自身と三人との関係とを重ね合わせたこの数式を愛することで、二人を愛したのではないか。そんな解釈も出来ないだろうか。オイラーの等式が博士の愛した数式とは限らないと前述したが、この自分の解釈によれば、博士が愛したのは他でもないオイラーの等式であり、それを形作る主人公達そのものである。

僕は今学校で数学を学べる。至極普通の事だが、「博士の愛した数式」を読んだ後に受ける数学の授業はなんだか少し特別。勉強を沢山しなければならぬ今、この作品に出会えて本当に良かったと心から思う。さて、次の授業が凄く楽しみだ。



## 星の王子さま

サン＝テグジュペリ 著

建築学科二年 宮 蒼依

「星の王子さま」を読んだ

——特別な存在とは——

私がこの本を読んだのは今回で二回目だ。小学生で読んだ時は意味が分からなかった。今回この本を選んだのは、そのためだ。時間がたつた今もう一度読んでみようと思った。だがなぜか、何度か悲しくなった。なぜだろうか。

「星はどれも声を出さない。きみだけが他の人たちのと違う星をもつ…。」

これは星の王子さまが「僕」とお別れをする時に言った言葉だ。ありふれた物を特別な存在にするのは、環境や周囲の人などではなく、その人自身なのだと思うされた。

星の王子さまは、自分の星で花といざこざを起こし、旅に出る。いろんな星を訪れ、いろんな人に出会う。最初の星には王様が一人。王様は一つ一つに命令を出した。二つ目の星にはうぬぼれ男が住んでいた。「崇拜してくれ」と彼は言った。三つ目の星には酒飲みがいた。酒を飲む恥ずかしさを忘れるために、酒を飲んでた。四つ目の星にはビジネスマンがいた。新しい星を買う為に今所有している星を数えることに忙しそうだった。五つ目の星には規則によって一秒も休めない点灯夫がいた。最後の星には永久的な事しか知ろうとしない地理学者がいた。王子さまは大人は変だと思った。そしてその後、地球にやってくる。地球には、百十一人の王様と七千人の地理学者と、九十万人のビジネスマンと七百五十万人の酔っぱらいと三億千百万人のうぬぼれがいた。電気が発明される前には四十六万二千五百十一人の点灯夫がいた。

私はここまで読み進めハツとさせられた。王子さまが変だと思っていた大人ばかりが地球に居るのだと思った。権力に溺れる人、周囲の声を気にする人、快樂に逃げる人、財力にとらわれる人、労働が生きがいの人、学問がすべての人。読んでいて悲しい気持ちになる理由はここにあったのだ。私自身が少なからず小学生やそれより幼い頃に比べ、それらのことにとらわれているからだろう。

そして王子さまは、星に置いてきたあの花と同じ種類の花畑を見つめる。唯一の存在だと思ひ、わがままを聞き、水をあげ、かわいがっていた花は、特別などではなかったのだと思つた。悲しむ王子さまはキツネと出会う。「きみはまだおれにとっては十万人のよく似た少年たちのうちの一人ではない。…きみにとっておれは十万人のよく似たキツネのうちの一匹ではない。」けれど、絆が生まれた瞬間、お互いにとって無くてはならない存在になる事をキツネは教えた。そして王子さまは、自分が愛した花は唯一の存在で、間違いなく特別だったのだと思つた。王子さまは、自分の花のもとへ帰るため蛇にかまれて「僕」とお別れをする。王子さまは「僕」に、星を見たら、バラと一緒にいるのだと思ひ出して笑つてという。

「星はどれも声を出さない。きみだけが他の人たちのと違う星をもつ…。」

「僕」にとつて星は王子さまになったのだろう。

今の私は星を見ると亡くなった祖母を思い出す。それは私にとつての特別な人だからであつて、他の人は別の事を思う。星を見ることで支えられている気持ちになる。

きつと時間が経てば、私の星は意味を変えるだろう。ただ、私の支えになる事は変わらない。私は長い将来の内、いくつの星に出会い、どのような花を見つけたらだろうか。どのようにして花を愛し、どのように育てていくだろうか。星の王子さまのように、環境や周囲の人ではなく、私自身によって特別な存在だといえるものを見つけ、愛し、育てていきたい。

星や花は必ずしも人ではないだろう。柔軟な発想で、他の星の住人の事も理解して尊敬して生きていきたい。

# 老人と海

ヘミングウェイ 著

建築学科二年 吉村 架音

「老人と海」を読んで

——強く、前向きに生きてみることに——

私がこの本を読むことにした理由は、数多くあった本の候補の中で、唯一タイトルから本の内容を想像することができなかったからだ。この本はどんな話なんだろう、と唯一手に取っていた本だった。

長年漁師として生活してきた老人は、不漁の日々が続いてきたある日、いつもより遠くの沖へ出て、大物のカジキを捕まえる。ハバナの街へ帰る途中、捕まえたカジキが鯨に襲われてしまい、カジキの身は喰われ、骨だけとなった。私は、あえて本のあらすじは読まずに本編を読んだのだが、老人がカジキを捕まえたが、それが鯨に喰われてしまう。というとてもシンプルな物語だった。しかし、物語自体は短いながらも、老人がカジキを釣り上げるまでの闘いの日々や、彼を慕う少年マノーリンとの交流の部分など、心を動かされる部分がいくつかあった。

ある日、いつもより遠くの沖へ一人漁に出た老人は、仕掛けておいたエサに大魚が喰いついていることに気づく。そこから、大魚を釣り上げるまでの三日間の日々が始まる。ロープの摩擦で手の平が裂けようと、照りつける太陽の熱で倒れそうになりながらも、己の目標を達成するまでは絶対に諦めない屈強な精神力を持つ老人に自然とパワーをもらった。海の上では孤独で、それでも長年漁師をやっているため海のことには常に何でも分かっているのだから、老人は度々カジキに話しか

けたり、いつの間にかカジキとは仲間のような関係になつていて感じた。老人に捕獲されるカジキは、老人そのもののように見えた。周りの鯨にも負けず生き、最終的には弱まりながらもしっかりと生きようとする姿。それが、周りの若い漁師たちから不評を言われようとも真つ直ぐ漁へ出かけ、死闘の日々で体力が尽きそうになりながらも戦い続けたその姿と重なったのだ。老人がカジキを釣り上げ帰る途中、鯨に襲われた場面では、次々と襲われるカジキを守ろうと、その場にあったナイフや棍棒などを全て駆使し、鯨と戦う姿はとても素晴らしかった。

「たった四〇ポンド持っていかなかっただけさ。舟が軽くなって、帰るのに丁度いいじゃあないか。」カジキを鯨に喰われたとき、老人が呟いた言葉だ。二日間も命懸けで闘い、手に入れた獲物を外敵に奪われ、こんなポジティブな言葉を普通、言えるのだろうか。自分の立場になつて考えてみた。頑張つて頑張つてやっと手にした目標を、一瞬にして奪われたとき、まずそんな言葉は第一に出ないだろう。色々な経験を経て、たくさんの知識がある老人だからこそ、そのときは前向きな言葉を発せただと思う。鯨に襲われ続けて、結局骨だけになったカジキを持ち帰る老人の姿は一変して、哀しみが漂っているように感じた。仲間を守りきれなかった軍人のような姿にも見えた。帰港し、マノーリンに励まされた老人は、また漁に出ようとする。漁の途中、「あの子がいれば」とマノーリンの事を度々口にしていた老人。次は、マノーリンと共に漁へ出て欲しいと強く思った。

周りの漁師たちから不評を言われ続けた老人だが、骨だけになってしまった大物カジキをみた周りの漁師たちはさぞかし驚いただろう。結果は大きな収穫でなくても、その経過で得られた感情や知識、経験は、いつか必ず自分自身の武器になるのではないかとと思う。私は結果ばかりを気にしてしまう。世の中も結果ばかりを求めがちだが、たまには結果だけでなく、結果までの一つ一つの経過に着目して、次も、次から頑張つてみるのも良いと思った。

## 3年生の部

## 不登校でも大丈夫

末富 晶 著

機械工学科3年 田村 晴海

「不登校でも大丈夫」を読んで

私は自分のことを、「他人の人生を知ることが好きな人間」として認識しています。今回この本を選んだのも、やはりそういう世界を知りたかったからなのでしょう。

不登校というのは一般的に、社会の枠組みから外れることだと思われがちです。私はこの本のタイトルを見て興味を持ち、すぐさま手に取り読み進めました。するとどうでしょう、それまで私の中にあつた不登校のイメージがみるみるうちに一変した…とまではなりませんでしたが、「不登校」という人生の新しい側面を知ることができました。

この本は、一人の不登校児が大人になるまでの道を綴った、学校に行かない生き方の体験記です。彼女は学校の外の世界で少し変わった大人たちと出会い、何も予定の無かった自分の未来を、自分で決めていきます。

「私が学校から離れ、もうまともな人生は歩めないのではないかと考えていた時、私にとって学校という存在は、生活の中ではほとんどすべてとっていいくらいに重要な部分を占めていて、とても頼りにしていたその先の人生へとつながる道しるべでもあり、だからそれを失うことは本当に大きな恐怖だったけれど」

この長い一文は、著者である末富晶さんの強い不安が表れている一文です。しかし、これには続きがあり、私はその内容に衝撃を受けました。

「いざ行かなくなってしまうと、その空いたスペースは学校に行っていたらできなかった経験、学校に行っていたら会えなかった人たちとの出会いで次々に埋められ、そのことが次第に未来を指し示す明かりとなっていました」

彼女がこのような経験ができたのは、それが自分で

決めた道だったこと、彼女がとにかくなんでもやってみる性格だったことがとても大きいと思いました。学校に行っても行かなくても、大事なのがそれが自分で選んだ道なのだと自信を持つこと。やはり最初は怖いかもかもしれませんが、私もいつか知らない場所への一歩を踏み出してみようかなと思います。

彼女が二十歳くらいの頃、彼女の東京某有名大学の友人がふと呟きました。

「それで、僕らはいったいいつ選ぶだろう」

いい高校、いい大学を選べばそれだけ今後の選択肢が広がりますが、その中から選ぶようになるのはいつなのでしょう。私はこれについて「人によって大きく時期が違うが、いつかは決める日が来る」程度に思っています。私が今いる高専も、自分の意志で決めた結果です。ですから、ここで起こることで自分が幸せになるか不幸になるか私次第というように思います。

『君たちはどう生きるか』でもありましたが、人間は自分の生き方を自分で決定することができます。未来の不安に悩まされるより、今やるべきことを全力でやる。そんな生き方にとても憧れます。

この本を読み終わった後、私は素直に思いました。

「ああ、こんな人生もいいものだな。」

こう思えたのは、著者の末富晶さんが悔いのない人生を送っていたから、それを本にして伝えてくれたから。尊敬と感謝の気持ちでいっぱいです。私は不登校ではありませんが、この『不登校でも大丈夫』という本は、いま生き方に悩んでいる人に向けた本だと思います。届くべき人のところへ届けるため、一人でも多くの人にこの本の魅力を知ってもらい、読んでもらえたらなど、心の底から思える本でした。

## わたしはマララ

マララ・ユスフザイ 著

電気情報工学科3年 長橋 朋也

「わたしはマララ」を読んで  
—— 平等と教育 ——

2014年、マララ・ユスフザイさんがノーベル平和賞を受賞したというニュースが報じられた。彼女は当時17歳で、ノーベル賞受賞者としては最年少なのだそうだ。私はその頃中学生だった。あまりニュースを見なかったのも、私は受賞の事実こそ知っていたものの、それ以上詳しいことはよく知らなかった。

「わたしはマララ」は、そのマララさんが書いた自身の体験談である。出版された当時は随分話題になっていたように記憶しているが、私は読んだことがなかった。それで、この機会にと手に取ってみた。

マララさんはパキスタン北部の山岳地帯、スワート渓谷に生まれた。しかし、彼女の国では娘が生まれた日は悲しみの日になる。男の子が生まれたら祝砲を鳴らし、女の子が生まれたらカーテンのうしろに隠す、そんな国に彼女は生まれた。

彼女は非常に勉強熱心な子供だった。しかし、タリバンがスワートにやってきてからというもの、彼女を取り巻く状況はどんどん悪くなっていった。タリバンによって女性への教育は禁止され、たくさんの学校が爆破された。厳しい状況の中、彼女は自身の考えを訴え続けた。身の危険があるにもかかわらず、ブログに日記を載せたり、マスコミのインタビューに答えたりした。そして2012年10月9日、スクールバスに乗っていた彼女は頭を撃たれた。懸命の治療により一命をとりとめた彼女はニューヨークの国連本部で教育の大切さを訴えるスピーチを行った。

私たち日本人の子供は、ほぼ全員が学校に行き、教育を受けることができている。しかし、世界には教育を受けることができない子供が未だに多く存在する。また、理由は様々だが、特に女性への教育が後れている。誰もが平等に教育を受けられるべきだとマララさんは訴え続けている。

「世界には、未だ教育を受けられない子供たちが沢山いる。」

この言葉を、私はこれまで何度聞かされてきただろうか。数えきれないとまでは言わないが、それなりに

聞いた記憶がある。しかし、その言葉は大抵、単純に勉強しないで怠けている私への叱責でしかなかったように思う。少なくとも私はそう感じた。もちろん私が学びの権利を放棄したのは愚かであったが、問題はこの言葉を自分への叱責としか捉えられなくなっていたことのほうにあると思う。実際、この言葉を聞いて私が途上国の教育に恵まれない子供たちに思いをはせたことは一度もなかった。教育を受ける権利が保障された私にとって彼らは全く別の宇宙の住民か、もしかしたら、昔話の登場人物のような認識でさえあったのかもしれない。

ところで最近、日本のある医学系の大学が女子受験生の入試の点数を操作していたというニュースが話題になった。私もこのニュースには衝撃を受けた。マララさんの育ったパキスタンとはやや事情が違っているので、完全に同列に扱うことはできないかもしれない。だが、本来そこで学ぶことができたはずの人の権利が奪われたことに違いはないように思う。学びの機会は平等に与えられるべきである。

私たちの住む日本は今どのような国だろうか。教育はほぼ全ての子供が受けている。女性への差別はまだ少し残っているかもしれない。学校が爆破されたりはしない。だが問題がゼロとは言えない。私たちは他国の実情をもっと知り、教育の充実のためにできることを考える必要があるだろう。そして私たちもまた、よりよい日本のために声を上げる必要があるのではないだろうか。

「私たちの言葉で世界を変えることができます。」  
という、マララさんの言葉を信じて。

## 面倒だから、しょう

渡辺 和子 著

環境都市工学科3年 石岡 紘平

「面倒だから、しょう」を読んで

『面倒だから、しょう』は、ノートルダム清心学園の理事長を歴任された、渡辺和子さんが書かれた本である。『面倒だから、しょう』という書名を最初見たときに、面倒だからしたくないんだよなと思い、何となくマイナスイメージを持ってしまったが、数ページ読み、中の言葉をパラパラと見た時に、いくつか心に響くものがあったためこの本を読もうと決めた。

効率的に、合理的にとさまざまなことが機械化する現代の中で、小さな事こそ、心を込めて、ていねいにしよう。安易に流れやすい、自分の怠け心と闘ったときに初めて、本当の美しさ、自分らしさが生まれてくる。時間の使い方は、命の使い方。この世に雑用はない。用を雑用にしたときに、雑用は生まれるなど、置かれた場所で咲くために実践できる心の在り方や考え方を著者が過去に経験してきたエピソードを中心に解説してある。

この本を読んで、僕の心に特に響いた言葉が二つある。まず一つ目は「あたり前のことがありがたいものだと思えば、幸せの度合いは高まる」という言葉だ。七月に西日本を中心に記録的な集中豪雨が起きた。これによって、さまざまな地域で被害が出た。実際、呉市でも大量の土砂や断水により、生活が困難になった。今まで断水というものを経験したことがなく、水がでないとこんなにも生活がしづらいのかと身をもって経験した。この災害がなければ、きっと気づけなかったことだと思う。それは、いつも蛇口をひねれば水が出てくるのが当たり前で、何の疑問も関心も持てなかったからだ。しかし、断水を経験して、生活していく上で水がどんなに大切なのかということに気付くことができた。今回は、災害によって断水が起き、自分が水がなくて困ったという体験をしたから水のありがたさに気付けたが、日々の生活の中で当たり前にあるものは何一つなく、何気なく使っているものでも今あるものはありがたく、あることの難しさに気づき、感謝する心が大切だと思った。

二つ目は、「叱ってもらえることに感謝する」という言葉だ。僕は、平日は寮に入っているため自分の生活は自分で管理していかなければならないが、休日になり、家に帰ると母に幾度となく勉強しなさいと言われる。やらなければならないことはわかっているし、後でやろうとしているのにやる前にそれを言われるとやる気をなくす。しかし、この本を読んでよく考えると、母は僕のことを叱らずに放っておいてくれても構わない。それでも僕に言うということは僕のことを思ってくれている証拠である。それにもかかわらず、母に言われることに腹を立てていた自分を恥じた。自分中心、自分が良ければそれでいいではなく、相手に叱ってもらうということはその相手を嫌な思いにさせているということに気付いた。

日々の生活の中で、面倒だからやりたくないことはたくさんある。それから逃げることは簡単である。しかし、この本を読んで、それをあえて丁寧に行うことの大切さに気付かされた。怠ける心と向き合うからこそ、本当の自分に向き合える。嫌なことでも受け容れていくことが自分自身の成長につながると思う。僕にとって、『面倒だから、しょう』は自分自身を見つめ直すきっかけになった本だった。

## ボランティア奮闘記 日本財団広報グループ 著

建築学科3年 河本 真拓

「ボランティア奮闘記」を読んで  
——人を助けるということ——

自然には逆らえない。今年の7月6日から7日にかけての西日本豪雨災害でまたもや痛感させられた。

私は、今回の豪雨を受けて、最も被害の大きかった呉に住んでいることもあり、災害支援ボランティアに参加した。ボランティアでは、土砂を家の中から取り出す作業を行った。呉市では毎日数百人から千人ほどのボランティアの方々が土砂のかき出しを行っている。そんな地域の人々によるボランティアの先駆けとなったのが、七年前の東日本大震災の際のボランティアだろう。その際に多くの学生ボランティアを招集し、派遣した日本財団のボランティア奮闘記に興味を持ち、読んでみた。

様々なボランティア体験談の中には、共感するところがいくつもあった。

「なにができるか。それは行ってみないとわからない。」私はこの言葉にとっても共感した。高校生である私は、豪雨災害直後、「自分一人がボランティアに行ったところで大きな手助けにはならないのでは？」という気持ちが強く、ボランティアに行くことを躊躇していた。しかしながら、身近に豪雨被害で苦しんでいる人がいる中で、ただ何もせず、時がたつのを待つのではなく、実際に体を動かして被災者の方々の役に立ちたいと思い、ボランティアに参加した。「そんなに大変ではないだろう」と高をくくっていたが、実際に土砂のかき出しを行ってみると炎天下の中でひたすらシャベルを振り回し、土砂を積んだ一輪車を走らせる作業に15分程度でかなり限界が近づいてきた。土砂をかき出す作業がかなり重労働だと知り、驚くと共に、私も、たとえ小さな力だとしても、ボランティアに参加すべきだと思った。

「シンプルな真心」と人との「つながり」が必要とされているというのは本当にその通りだと思う。行くことに意味があると前述しているが、これはあくまでも、いかずに何もせずにいるのではなくて、被災者の方々の助けになるように、現地に行ってボランティアをすべきだということである。

しかし、ボランティアは、行くことがすべてではないと私は思う。今世の中では、現地に行って働いてこそボランティアというイメージが強くなっている気がする。もちろん、現地に駆け付け重労働をするのも一つの素晴らしいボランティアだと思う。しかしながら、支援物資を送ること、義援金として募金をすること、どれも立派なボランティアではないだろうか。被災された方々のことを思い、心配し、わずかでも役に立ちたいと思って行動していることに変わりはないだろう。たとえ、現地に行ったとしても、ボランティアは土砂をかき出すことだけではない。被災者の方々とって話をしたり、炊き出しをしたりすることもできる。

このように、様々な手助けの仕方があるが、どれにしても、助けたい、少しでも役に立ちたいという真心が大切なのだと思う。

また、被災者の方々の中には、家族を亡くしたり、家をなくしたりして、孤独に感じ、苦しんでいる人も多いと思う。そんな中私たちにできることは、被災者の方々に寄り添い、私たちにできることは何か考え、少しでも行動することだと思う。そうすることで、少しずつ被災者の方々の心を支えることができるのではないかと思う。

この本を読んで、私は改めて一人一人のボランティアへの気持ちや力が大切だと思いなおすことができた。私もまた、微力ながら、ボランティア活動に参加しようと思う。そして、みんなの笑顔が少しでも増えればうれしい。

## 4年生以上の部

## 君の話

三秋 隼 著

建築学科5年 今井 将隆

## 「君の話」を読んで

夏の匂い、夕日の色、街で聞こえる音楽、母の手料理の味、異性の肌の感触。これら五感人間の記憶と大きな関わりがある。いくつかの例を挙げると、夏の匂いからは夏の暑さ、夕日の色からはお気に入りの場所、街で聞こえる音楽からは友人との思い出、母の手料理の味からは家族での団欒、異性の肌の感触からは初めて手を繋いだ緊張。このように五感とは私たちに記憶を思い出させる鍵だということを、日々の生活や体験から私たち人間は知っている。

「君の話」も主人公の青年が様々な情景から少年の頃の記憶を頼りに、幼馴染との話が進んでいくという作品だ。話の定番ともいえるものだが、一つだけ決定的に違うことがある。それは、記憶が人によって作られ、植え付けられた記憶「義憶」だということだ。

この「義憶」というものは、認知症による記憶の忘却を防ぎ、脳への定着を強めることを目的とした技術を、応用し開発された。開発された理由は、人間の足りない思い出を補い人間性を豊かにするためだ。「義憶」にもいくつかの種類があり、結婚相手の記憶〈ハネムーン〉や我が子の記憶〈エンジェル〉などがあり、「義者」と呼ばれる現実に存在しない人間が対象の人間の中に生き、結婚相手や我が子を演じてくれる。「義憶」を脳に定着させる方法は簡単で、水と一緒に指定された錠剤を飲むだけだ。

この物語の主人公は、何一つ輝くことのできなかった、自分の青春の記憶を消すために〈レーテ〉を服用しようとした。しかし誤って、青春の記憶をより輝けるものへと作り変えてしまう〈グリーングリーン〉を服用してしまい、ある一人の幼馴染「義者」と共に過ごした輝かしい「義憶」を植え付けられてしまった。

二十歳の夏、一度も出会ったことのない、架空の存在であるはずだった幼馴染と再会し「君は、いろんな記憶を忘れてるんだよ。でもね、それは多分、忘れる必要があったからなの。」

と寂しげに幼馴染は笑う。そんな相手と恋をする話。

この話は、レコードのA面からB面に変えるという表現を使っている。レコードは主人公と幼馴染の二人をより深い関係にしたものだ。そして、話が今から終盤になること、語り手の交代、問題の答え合わせの始まり、これらを直接表現せず、たった一文で表現している箇所は、この話の中で一番のお気に入りだ。

人間の「記憶と嘘」がテーマで、嘘の価値を考えさせられた。そして、主人公とヒロインの自分のためにした嘘、相手のためにした嘘からできたお互いを思い合う関係に嫉妬してしまった。人を疑うことしかできない相手を、自分という存在で満たしていく場面は憧れてしまった。

本当は存在していない嘘からできた話、この嘘は救われない人間が、救われるための最後の手段として使われたものだ。現実から逃げるために使われたはずなのに、まるで本物であるかの様に、美しく、優しく、輝く、世界中の誰もが羨み、憧れてしまう嘘の話。

人は誰でも救われるために嘘をつく、人は救うために嘘をつけない。なぜなら、自分が傷つくのが怖いからだ。

人を救うために嘘をつける人がいるのならその人には、掛け替えのない大切な人がいるのだろう。

## 君に恋をただけじゃ、何も変わらないはずだった

筏田 かつら 著

建築学科5年 中山 幸

「君に恋をただけじゃ、何も変わらないはずだった」を読んで

あなたには支えてくれる人がいますか。

あなたには支える人はいますか。

あなたには恋のライバルがいますか。

この話には、主人公の他に二人、ヒロインのことを好きになる人物がいます。小学生の時に別れ、遠い地の大学で再会した幼馴染。姿、話し方、立ち振る舞い、全てが完璧なイケメン医学生。こんな二人を相手にする主人公はというと、ヒロインと同じ大学に通う冴えない不運な先輩。

どのくらい不運なのかというと、街を歩けば酔っ払いに絡まれ、コンビニに停めていた自転車は盗まれ、挙げ句の果てには、付き合っていた彼女に知らないうちに引っ越され音信不通。不幸話をしたら切りのない、不運な先輩です。

ヒロインとの出会いも最悪です。付き合っていた彼女が、自分の知らないうちに引っ越してしまったため、大事にしていた小説を返してもらえず、合鍵で部屋に入ろうとしたら、既にヒロインが住んでいて、不審者扱いをされるという出会いです。

こんな出会いをしましたが、ヒロインが自分の後輩の幼馴染ということもあって、仲良くなれます。

しかし、ヒロインは学校一美少女という噂も出回り、イケメン医学生に好かれてしまいます。イケメン医学生にヒロインを渡したくない後輩の幼馴染は、不運な先輩である主人公に自分の恋のアドバイザーになるように頼みます。

ここから物語は始まっていきます。

この話は主人公が後輩の恋の手助けと邪魔をしつつ、ヒロインとの関係性が発展していくというものです。主人公としては手助けをしているつもりでも、持ち前の不運の力のせいなのか、不注意のせいなのか、必ず後輩の邪魔をしてしまい、自分だけヒロインと良い関係になります。この場面は数カ所あるのですが、どれも主人公の不注意から起こるものでした。

また、広島大学をモデルにしている、広島に住んでる人間なら、自分の知っている土地の名前や場所、有

名なお店や団体などが登場し、馴染み深くいろいろと共感することができました。

一番共感できたのは、主人公が公務員志望で勉強中だということです。私自身、公務員を志望していて現在勉強中ですが、試験勉強の辛さや面接対策の方法など、自分と重なる点がいくつかあり、気づけば主人公を応援していました。

しかし、この主人公は試験が近づいているというのに、バイト・恋愛・相談事などで試験なんて上の空、という姿勢は同じ試験を受ける身として、もう少し試験に集中して生活を送ってほしいです。

不運なことは、小さなことでも積み重なれば、大きなものとなって人間に降り掛かってしまいます。この主人公も自分の力だけでは解決できないような不運な問題によって、心が折れかかるが、その時にヒロインの笑顔によって救われ、問題を解決します。

心から人を支える人間、支えられる人間の関係は美しく憧れてしまいます。この作品は読んだ人をそうさせる話でした。



**平成30年度 校内読書感想文コンクール 講評**

## ○平成30年度選考委員

一年選考担当 外村 彰

二年選考担当 上芝 令子

三年選考担当 木原 滋哉

四・五年及び専攻科選考担当

笠井 聖二 (委員長)

山田 祐士

## 読書感想文 総評

自然科学系分野 笠井 聖二

今年度の校内読書感想文コンクールは、7月の豪雨災害のため臨時休校のまま夏休みとなり、コンクールの内容を十分に説明できないままの実施となりましたが、応募してくれた学生と、関係した教職員の皆さんのおかげで、例年どおり実施することができました。有り難うございました。

昨年度、応募が0件であった4年生以上にも応募があり、良かった反面、2年生・3年生の部では最優秀賞がなかったことは残念なことです。「読書感想文」は、単に本の内容を説明するものではありません。本を読んで感じたこと・考えたこと、何故そのように感じたか・考えたかを、「読んだ貴方」側のこととして書くことが大切だと思いますので、それが伝わる感想文を心がけて下さい。

また、年に1回のコンクールのときに感想文を書くだけではなかなかよい感想文にならないと思います。まずは、この「図書だより」に載っている感想文を読んで、感想文作者と「本の世界」を共有してください。そして、日頃から本を読み、本から得たこと感じたことを友達に伝えながら、いろいろな本の世界をたくさんの友達と共有していきましょう。そして、その結果として、この読書感想文コンクールに臨んでくれると良い作品になるのではないかと思います。次回を期待しています。



## 一年読書感想文 講評

人文社会系分野 外村 彰

今年度の読書感想文は、七月の豪雨災害のため夏季休暇が前倒しになったことで、例年のような流れでの指導伝達が出来なかった。

通例だと前期末試験の返却と併せ、国語便覧を用いるなどして感想文を書く際の留意事項を伝えるのだが、今回は長文メールを何度も学生に一斉送信して周知を図り、課題作品も急遽30を選んだわけであった。

それでも今年の一年生は各々の感動を基底とした、よい文章が書けていたと思う。芥川の「地獄変」「奉教人の死」「藪の中」、遠藤周作の「海と毒薬」「沈黙」、大岡昇平「野火」、太宰治「人間失格」、宮沢賢治「銀河鉄道の夜」がよく採り上げられ、それぞれの重いテーマと向き合って自己の心を凝視しようとする内容が折々に眼を惹いた。建築・環境都市・電気情報・機械の順に、各クラスの優秀作を選定するのに迷った。優秀作に選ばれなかった文章にも、さして当該作との差を認めたいものが散見されたほどである。

よい感想文の核には、何らかの「感動」が存する。それは疑問だったり、言葉にならない共感だったり、する。「感動」のない感想文では読者の心を揺り動かすことは難しい。

読書経験から得た「感動」を、文章の書き手は、もしわたしがこの登場人物の立場だったら、と仮定しながらストーリーを追体験しつつ、あらためて自分の考えた言葉により再構築を図ってゆく。そうした（自分なりの）再構築ぶりが、各人の文章の個性に表れるのだと思う。

よい文章を書くのは難しい。書けるのは「感動」が核にあるからだ。その大切な核を、自分の言葉で文章に構築し得るためにも、よい本と出会おう。そうして、これからもよい読書をすることで、自分の人間性を今よりもなお磨いて行ければ素敵だと思う。

## 二年読書感想文 講評

人文社会系分野 上芝 令子

二年生は毎年、課題図書の中から選んで書くという形で実施しています。ご承知の通り、今年は突然夏休みに入りましたので各本に関する話や読書感想文というものは…などという、普段なら期末テストを返しつつおこなう恒例の話もできないまま、連絡網での一方的なお知らせという非常手段での周知になりました。若干の不安を感じつつ、二回にわたって送った長いメールを皆さんしっかり目は通してくれたようですが。

今年の全体的な印象は「あらすじレポート」が目立つところでしょうか。あらすじはあってもいいのですが、4枚中3枚にあらすじを語られ、最後に「印象に残った場面は〇〇です」などと結ばれると、読んでいるこちらは寂しいやらがっくりくるやら…（勝手な思いですが）。

読書感想文は自分の経験や思いとその本を結びつけるという作業です。そして、それができている感想文は例外なく読んでいて面白い、納得できる感想文になっています。その本を読んでなにかしら揺り動かされた感覚、それを自分の言葉で表すこと。ですから本当は、読んでも何もぴんとこなかったのなら書かなくていいのです。若い時に出会えた「ぐっとくる」本は一生の宝物になります。今年の課題図書25冊の本の中にもあなたにとっての「当たり」がきっとあるはずです。それを見つける労力を惜しまないでほしいと思います。今回の優秀作は、出会えたその本をきっかけに自分の中にある「思い」を見つけられた、そういった感想文が選ばれたと思います。

### 三年読書感想文 講評

人文社会系分野 木原 滋哉

3年生の課題は、ノンフィクションや評論を読んだ感想文である。今年度は、西日本豪雨の被害を前にボランティアとして活動した学生も多かったこともあり、ボランティアをテーマにした本を選ぶ学生が多かった。単に本を読んでボランティアについて考えるのではなく、ボランティアとしての体験を踏まえての感想文が多かった。

感想文は、自分だったらどうだろうかと、想像力を広げる作業である。自分の経験と他人の経験を重ね合わせる作業である。自分を顧みている感想文4篇を優秀賞とした。さらに現代社会について学んでいる3年生は、感想文を書く作業を通して、自分の気持ちや決意を再確認するだけではなく、現在社会の矛盾、問題、課題などにももっと目を向けてほしいところだ。こうした観点が希薄だったために、今回は最優秀賞は該当作なしとさせてもらった。

### 四・五年及び専攻科読書感想文 講評

機械工学分野 山田 祐士

4年生以上の部は、近年の応募者数が隔年で0人の状況下であり、昨年度の実績は無かったため、今年は1人以上の実績があるのではないかと春から期待をしていました。しかし、今年は豪雨災害で夏休みが変則的になったため、夏休みの宿題でもない読書感想文を誰も自主的に書いてくれないのではないかと心配していましたが、なんと嬉しいことに3人から応募がありました。さらに、それぞれの作品を読んでみたら、オリジナルの本を読みたくなくなるくらいに書き込まれており、図書便りに掲載するには適当な内容だと思いました。今回応募してくれた3人には大変感謝しています。

さて、応募して頂いた3作品ですが、読書感想文コンクールという視点で見ると、まずいずれも十分に読書されて自身の感想が記されており、どれも熟読玩味されていると感じます。次に読書を通してどのような学びがあったかを自身の言葉を用いて表現しているか、また、これまでの自身の体験なども交えて説得力のある文章で書かれているか等の教育的な視点から見て行ったときに3作品の評価に差が出てきているのではないのでしょうか。

良い本と出会い、自身が感化され、それらをありのままに表現する過程で様々な表現手法があり、その中に読書感想文の型、作法というものが存在しているのではないかと思います。いろいろな文章が書けるということは自身のスキル向上にもつながると思いますが、何より出会った本を深く理解することが出来るのではないのでしょうか。これからも素晴らしい本に出会い、人生を豊かにしていってください。

## 行事報告 平成30年度ブックハンティング

学生会 文化環境委員長

鎌倉 脩士朗（機械工学科4年）

6月17日（日）にブックハンティングを行いました。

開催日が日曜日という休日ではありましたが、1～3年生、4～5年生と多くの学生に参加してもらいました。

今回も場所はジュンク堂書店広島駅前店でした。予算は一人1万円程度で、学生1人1人が選びました。書店には多くの本が並んでおり、90分という選書時間内に選びきれない学生もいました。

選んでもらった本は本校図書館に並びます。新しいジャンルの本を今回もたくさん選んでもらったので、是非図書館に来て読んでみてください。

ブックハンティングは毎年1回開催しています。来年も実施する予定なので、もっと多くの学生に参加してもらいたいです。また、予算は後援会により支援いただいています。

ありがとうございました。



## ブックハンティング図書紹介

### 3つのゼロの世界 貧困0・失業0・CO2 排出0の新たな経済

M. I.

現在、世界では戦争や貧困や環境問題など様々な問題が起こっています。進路や将来を考える上で、世界の今とこれからを知り、自分に何ができるか考えたいと思い選びました。

### ゲノム編集の基本原則と応用 : ZFN, TALEN, CRISPR-Cas9

S. I.

卒業研究に深く関わる内容なので選びました。ゲノム編集は近年急速に発達している技術です。現在3つの編集技法がありますが、それぞれの原理や、使い分けについて興味があります。

### 「らしい」建築批判

T. T.

今まで、建築を学ぶ上であまり考えることのなかった、建築に求められていることは何かという点に主眼の置かれた書籍であり、建築という分野で社会に貢献できるようになるための情報がつまっている一冊であるように思う。

### ケンチクカ 芸大建築科100年建築家1100人

K. Y.

本棚に並ぶこの本の背を見て選びました。この本の背は何十種類もの色できており、目を引くデザインになっています。背を見れば手にとってしまうと思います。

### 350万円で自分の家をつくる

N. S.

建築のコーナーにある本を見ると、とても難しそうな本や写真ばかりの本が多かったが、この本は、難しい建築用語を写真やイラストでわかりやすく理解でき、家ができたまでの工程を楽しく学べられそうな本だと思ったから。

### もっとやりたい仕事がある!

S. K.

高専は就職率100%という数字を残しており、企業側からの求人が毎年たくさんきている。そこで、どのような業界に自分は向いているのか知る必要がある。この本には、業界別に良い点、悪い点などが記載しており、ひと目でわかりやすくなっている。また、社会を知りつくしている池上彰が著者しているので信頼性に優れている。

### 14歳からの哲学入門

Y. A.

哲学といえば、難しいイメージがあるが、タイトルの「14歳からの」という部分を見て、興味を持った。この本は、14歳向けの哲学入門ではなく、偉大な哲学者はみな極端で幼稚な発想をしているという内容がおもしろい。

### 振り飛車の核心 さばきの基本手筋

R. H.

振り飛車をさせるようになりたい。  
将棋が好きだから。

### 混沌(カオス)ホテル

D. M.

本の裏のあらすじを見ていただくと分かりますが、理系の量子論が題材の物語で、興味をそそられる内容です。また、本の名前「混沌ホテル」以外にも4つの物語が収録されており、いろいろなSFを味わうことができます。

### Murder on the Orient Express

R. H.

この本は世界で何度も映像化された有名な作品であり図書館にも翻訳版があるので、それと合わせて読むことで、日本語と英語での表現の違いを楽しめると思います。

### 世界の天空の城

M. F.

さまざまな天空の城が世界には存在していることに驚きました。綺麗な景色が好きで、空や自然、建物の中ではお城が好きなので表紙の写真に惹かれ、この本を選びました。

### 京 古都の情景

A. Y.

春、夏、秋、冬、それぞれの季節での美しい京都の情景が写されています。表紙を見た時、その美しい写真に、私は心を奪われました。いろんな人にこの写真集を見てほしいと思ったので、選びました。

### オリジン

Y. Y.

この作品はダ・ヴィンチ・コードシリーズの5作目で暗殺事件の謎を人工知能とともに解き明かすストーリーです。

世界各地で高い評価を得た作品なのでぜひ読んでみてください。

**サイバー・エフェクト 子どもがネットに壊される**

T. U.

最近「依存症」という言葉をよく聞くのだが、依存すると一体実生活はどのような影響を及ぼすのか興味があった。また、インターネットなどが世の中に普及した現代において子どもの時からそれに触れていると将来的にどうなるのか。

そしてそれらの依存の怖ろしさを考えてみることでどうすれば良いのかやそれらがさらに発達した時代になるとどうなるのかを皆さんにも知ってほしい。また考えてほしいので選んだ。

**動物たちのすごいワザを物理で解く**

A. A.

この本では、動物の能力や動物にしかできないすごいワザを、物理という観点から分析しています。物理が苦手な私もこの本によってより楽しく勉強できると思います。動物好き、物理が苦手、興味がある方、ぜひどうぞ。

**屍人荘の殺人**

Y. O.

まず、この本はデビュー作にも関わらず、偉大な賞を三冠受賞していることが凄すぎます！

実際私もテレビの紹介や、著名人からの絶賛の声をしていると、買わずにはいられません。是非読んで欲しいと思います！

**ソロモンの偽証 第1部 事件**

A. Y.

この本は1度読み切ったことがあるが、何度でも読みたくなるような物語だった。一人の男子生徒が死亡したことをきっかけとして、揺れる城東第三中学校で、登場人物の心情の変化が上手に表現されている。最後のクライマックスに向かい、次々と分かる真実に目が離せない一冊。

**僕はロボットごしの君に恋をする**

T. H.

この本を見た時、まず表紙に目をひかれました。タイトルを見ると、ただの恋愛小説かと思いきや「ロボットごし」となっており、興味を持ちました。でも表紙には一切ロボットが描かれておらず、更に興味を持ちました。

**電気電子数学入門**

S. A.

微積分や複素数などの難しい計算の多い電気分野。この計算を分かりやすく多分野にわたってマスターできる本です。

説明も詳しく、練習問題も多くあるので初学者にも理解しやすいオススメの1冊です。

**魔法使いの弟子たち**

K. Y.

中学生の頃に読んでいて一番惹き込まれ印象に残ったためにこの本を選びました。

突如蔓延した新興感染症「竜脳炎」の発生当初で生き残れたわずか3人の主人公を初めとする登場人物たちが、その後後遺症として「人の過去を覗い」たり「手で触れず物を動かせ」たり「日に日に若がえっ」たりする不思議な能力を手に入れてしまったことから始まる物語で、3人の活躍に目を離せず、いくら読んでも飽きません。

**ものすごくなるさくて、ありえないほど近い**

S. Y.

主人公のオスカーは、天才で理屈っぽい。理屈どおりでないことに困惑する。人との出会い、新たな発見により、「世の中は理屈だけではない」ということと、もう1つ大切なことを理解する。

**古代エジプト三〇〇〇年史**

M. S.

古代エジプトは謎が多く、とても興味深い。ピラミッドを作った理由、未盗掘だったツタンカーメン王の墓、ピラミッドの入口の謎など。昔の人々がどのようにして作ったのかなどの不思議がぎゅっとつままった3000年の歴史が読めると思ったので。

**架空OL日記**

J. Y.

バカリズムが面白い。

本を読むのが苦手でも楽しく読むことができるため。

“OLになりきって”というところが自分的には新しいと思った。

**アリエナクナイ科学ノ教科書**

K. T.

この本では、不老不死やゾンビ、タイムマシンなど、SFやファンタジーでお馴染みの設定について、近い事例はなにか、どのような方法で実現できるか、何が課題なのかなど分かりやすく説明されており、面白いです！

**そして誰もいなくなった And then there were none**

M. M.

「そして誰もいなくなった」は、ある程度有名でドラマにもなった話です。

皆さんも親しみやすく読んでいただけて、しかも英語でルビ訳がついているので、英語が苦手な人も楽しく読めるところが良い点です。

**ミライのつくり方2020-2045 僕がVRに賭けるわけ**

R. K.

今からわずか27年後の2045年。VRは僕らの常識のはるか先にある一本書はVRが日常にもたらす革命を予言する、VR開発者必読の一冊。未来を知りたいればこの本を読み！

**入門vi**

S. K.

Unix系OSには「Vi」が必ず標準で搭載されている。Unix開発者・サーバー管理者は最低限度使えることが望ましい。本書はVi専門の解説書だ。ViとViクローンのVimについての基本操作から応用に至るまでを取り扱った本格的な解説書だ。Viを本格的に学びたい人には是非お薦めしたい一冊です。

**平和の地政学 アメリカ世界戦略の原点**

N. N.

戦後から現在までのアメリカの国家戦略を決定的にしたスパイクマンの名著の完訳版。マッキンダーのランドパワー対シーパワーの図式を発展させ、両者に挟まれたリムランドを押えることの重要性を説いており、大戦中の考えなので、現在から見ると誤った記述（ソ連との同盟など）はあるものの、ユーラシア大陸にある大国がアメリカの脅威となるという後のソ連“封じ込め”を予感させる洞察など鋭い戦術論が展開されていて、非常に刺激的な一冊です。地政学や戦略といったものに興味のある方にオススメです。

**めっちゃ、メカメカ!強度設計**

K. O.

物作りにおいて、大切なこととは…デザインは確かに人の目を引きつけるのに重要だ。高性能であることは商品が選ばれる時の強みである。しかしもっと根本的に大事なものがある。それが強度、耐久性だ。どんな状況でも長く使うことのできるものを作ることは、日本の産業を担う高専生にとって絶対必要な力である。この本でその力を身につけよう！

**骨格百科—スケルトン—**

K. F.

生き物の体は無駄がなく、とても神秘的です。ですが普段そうそう見ることはありません。そんな中で人間を始めとした色々な動物の骨格の素晴らしさを魅せてくれるのがこの一冊です！

**野外毒本**

G. K.

毒を持っている生き物、もしくは人間にとって毒となる生き物。日本にいる彼らを実際の事件例を交えて教えてくれます。もしかしたら、役に立つかもしれない。

**わざわざゾンビを殺す人間なんていない。**

N. I.

「アリス殺し」や「玩具修理者」で知られる著者の作品です。

ゾンビやミステリーというあまり見ない組み合わせにひかれました。

表紙も独特な世界観で素敵だと思います。

**クトゥルフ神話 TRPG**

M. Y.

矮小な人間である探索者たちが、様々な宇宙的恐怖に晒されつつも生き残ることを目的として足掻く様を楽しむホラーTRPG。

不可思議な世界観を楽しみつつ思考力を鍛えよう！

**苦汁 200%**

A. O.

2012年アルバム『死ぬまで一生愛されてると思ってたよ』でメジャーデビューしたロックバンド「クリープハイブ」のヴォーカル、ギター担当の尾崎世界観が書く前作「苦汁 100%」に続く赤裸々日記の第二弾！

**俺たちの明日 エレファントカシマシの軌跡**

K. F.

30年もの間日本のロックを賑わせてきたエレファントカシマシの宮本浩次の挫折や成功をありのままに述べた本となっています。エレカシが好きな人や今まで知らなかった人でも宮次の人間性に惹かれること間違いなしです！

**最強部活の作り方 名門26校探訪**

S. S.

呉高専は、偏差値は高いが部活動のことはあまり聞かないので、何か部活作りの役に立てればいいと思い選んだ。

名門校ということで実績も立証も出来ているので具体的な練習法から精神的な面まで学べると思い選んだ。

名門校の考え方に興味があるから。

学生と築いていく図書館



今年度も学生がインキュベーションワークで図書館に華を与えてくれました。

学生達は、図書紹介のPOPや、図書の宣伝ポスターを作成しました。

開架だけではなく、システムの開発で図書館業務の効率化にも協力してくれました。

DVD 利用回数ベスト 10

順位	題名	No.
1	この世界の片隅に	703
2	60セカンズ	121
2	世界の中心で愛をさげぶ	210
2	死ぬまでにしたい10のこと	217
2	トイストーリー	237
2	父親たちの星条旗	363
2	博士の愛した数式	364
2	マスク	374
2	余命1ヶ月の花嫁	477
2	ナイトミュージアム	518
2	テルマエ・ロマエ	586
2	コクリコ坂から	650
2	君の名は。	702

(調査対象期間：平成30年4月1日～平成31年1月31日)

図書貸出回数ベスト 10

順位	題名	著者
1	かがみの孤城	辻村深月
2	凶犬の眼	柚月裕子
3	単位が取れる流体力学ノート	武居昌宏
3	新 TOEIC TEST パート5 特急 400 問ドリル	神崎正哉, Daniel Warriner
5	機械設計技術者のための基礎知識	機械設計技術者試験研究会編
5	3;公式 TOEIC Listening&Reading 問題集	Educational Testing Service
7	編入の線形代数徹底研究	桜井基晴
7	1;公式 TOEIC Listening&Reading 問題集	Educational Testing Service
7	編入の微分積分徹底研究	桜井基晴
7	文部科学省後援工業英検3級クリア	高橋晴雄, 中山裕木子
11	リーディング編;公式 TOEIC Listening&Reading トレーニング	Educational Testing Service
11	編入数学入門: 大学編入試験対策	桜井基晴
11	TOEIC L&R テスト至高の模試 600 問	ヒロ前田, テッド寺倉, ロス・タロック

(調査対象期間：平成30年4月1日～平成31年1月31日)

編集後記

毎年、ブックハンティングや推薦図書等で、様々な方の意見を取り入れています。時間があるときには図書館に来てみてください。新たな世界が見えてきますよ。

【表紙】 風ぐ波止場

アレイからすこじまで撮影しました。呉の軍艦を最も間近で見ることのできる場所です。

(撮影：呉高専学科 4年 佐藤 功典 )